

---

# lucid love

朱希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

lucid love

### 【Nコード】

N9344W

### 【作者名】

朱希

### 【あらすじ】

clarity loveの続編です。あれから10年後双子は高校生になった。七海は二人にやりたいことをして欲しいと思うが  
∴ clarity loveを読んでからのほうがわかりやすいと思われま

## 登場人物

Clarity Loveからの登場人物が殆どです。

日向瑠唯

今回の主人公。おとなしい子。頭が良くて歌も上手。運動はあまり出来ない。

日向美羽

瑠唯の双子のかたわら。運動が得意で中学生の頃からテニスをしている。

日向七海

前回の主人公。香南とは今でもラブラブ。割と天然入ってる気がしないでもない。

日向香南

人気バンドanfannのボーカル。七海のだんなさん。七海はもちろん双子や一樹大好き。

日向 一樹いっしき

七海と香南の子供。女の子。3歳。日向家のお姫様

anfannのメンバー

城之崎夏流

anfannのギター担当。周とは今でもラブラブ。双子や一樹のことを自分の子供のように可愛がってる。

久野周

anfannのベース担当。未だに謎な考えの持ち主。けどもちろんなツのことは愛してる。

滝川燎

anfanningのドラム担当。いい加減結婚しなきゃって思ってる。けどこのまま自分の趣味を楽しむのもいいかなって思ってる。

雅さん

anfanningのマネージャー。可愛いお嫁さんをもらって嬉しいけど、しかし仕事が忙しすぎてなかなか会えない。

その他は増えるたびに書いていこうと思ってます。

歌についての説明 B L有(前書き)

曲の説明をしているので少しだけB L表現が出てきます。ご注意ください

## 歌についての説明 B L有

ここではanfanningが作った(と設定している)曲について紹介します。

Lucidシリーズだけ読んでいる方はやっぱり突然出てきては?という感じだと思ったので。

まず一つ重要な点はanfanningは皆それぞれ曲を作っています。そしてそれぞれ作る曲の雰囲気違います。

燎が希望、周と夏流が愛、香南が絶望これがコンセプトになっています。

周と夏流に関しては愛と言っても周の愛はどす黒い愛、夏流の愛は純粋な愛となっています。

下には題名とその説明を少し書かせていただいております。

### 【13番目の祈り】

これは完全に香南の曲です。初期のころの曲でこれでanfanningが爆発的に売れたと言ってもいいぐらいです。完全なる絶望。

### 【black kiss】

周の曲。夏流とのキスを再現したらこんな感じになったって感じですよ。多分、曲の最後の方に周が投げキッスするのが恒例なのではないかなとか想像しております。えろい曲。

【white kiss】

夏流の曲です。周とのキスを再現した曲。これでかなりこいつらできてんじゃない？って思われそうですよね^^（まあ実際そうなんですけど）black kissとは対の曲として良く歌われてます。多分とても可愛い曲に仕上がってるのではないかと思います。この曲は作詞してみたいけど、夏流の可愛さに合うような作詞ができなさそう……

【twilight orion】

香南の曲。夕方に墮ちる星の音をイメージして作った曲。光さえも闇に包まれる。しかし、闇に負けたくないと言う香南の心の葛藤を表している曲。

【さよならの瞳】

燎の曲。また会おうねをコンセプトに作りました。ただ、歌詞は香南だと思います。本編でも書いてある通りアルバムには一切収録されておらず、ライブDVDも発売されていないので幻の曲とされています。

後この本編でよく出てくる【schatz】というアルバムについて説明します。

これは最後に香南が七海たち家族に送った宝物です。

一人一人を歌った曲が入っています。（全部香南の作詞作曲）

そして七海たち家族にあげたアルバムにだけ入っている曲がありま

す。

- 1、M e i n e l i e b e
- 2、B a c k b o n e , i n t h e e a r t h
- 3、A n g e l w i n g s
- 4、d o u b l e s m i l e
- 5、幻 - s e v e n t h o c e a n -
- 6、きみと言う光（七海の家のものにだけ入っています。）

また増えてきたら更新していきたくと思っています。

歌詞は、その、ちょっとずつ本編に入っておりますので興味がありましたら是非 c l a r i t y l o v e さんからください！



01

どんな君でも

どんなことになっても

僕は君を守るよ

l u c i d   l o v e   0 1

「はいちーず！」

七海の持ったデジカメから写真を取る音が聞こえる。

シャッターの前には七海の弟たちの日向美羽、瑠唯が立っていた。  
今日は二人の高校の入学式。

二人とも同じ高校に入ることにした。

「うんばつちりよ！二人とも制服が似合う！早速香南さんに見せないとね」

「いや、俺たちよりもななちゃんの今日の格好写した方がにーちゃん喜ぶんじゃないかね？」

「確かに、ななちゃんも撮ろうよ」

「いやいや、私をとってどうするの。今日はあなたたちが主役なんだから」

香南は仕事で入学式にこれなかった。

何とか来ようとしていたが、メンバーに止められたことと七海がちゃんと写真やカメラをと撮ると説得ししぶしぶ仕事へ向かった。

しかし、3年前に生まれた七海と香南の子供である一樹は力ナンに預かってもらっている状態である。

「もうそろそろ私は一樹を迎えに行くけれど、二人はどうするの？」  
入学式も無事終わり看板で記念撮影も終わった七海は一樹を迎えに  
いこうとする。

「んー俺はテニス部よってくる！どんな人たちがいるのか気になるし」

美羽は中学のときからテニスを始めた。

理由は入学した中学の中で一番強い部活がテニス部だったからだ。

厳しい部活で全国一位を目指すことが美羽の目標らしい。

高校もそのままテニスが強いとされている高校に入学することになった。

「そっか。瑠唯はどうする？」

「ぼ、ぼく？」

瑠唯は驚いたように七海の方を向いた。

瑠唯は中学の時も部活に入らずすぐ家に帰り七海の家事の手伝いをしていた。

本当は好きなことをしてといたかったが、すぐに一樹を生むこととなり、七海も一樹を育てることではいっぱいっばいで手伝ってもらうことがありがたくそのままになっていたのだ。

流石に瑠唯にも申し訳ないと、七海は高校では好きなことを目一杯  
してもらおうと思っていた。

しかし瑠唯の答えは首を横に振るものだった。

「僕は、家で手伝いをするよ。」

「けど、やりたい部活とかあるでしょ？見てきてもいいのよ？」

「ううん、僕は、これがしたいことだから。」

笑顔で言われると何も言えなくなる。

七海はどうしたらいいのかわからず結局二人で一樹を迎えに行くこ  
ととなった。

「おー！瑠唯！」

「おめでとう」

「いらっしゃーい！！うんうん！新しい制服似合ってる！」

スタジオのドアを開けると、ナツル、アマネ、リョウが向かいにいれ  
てくれた。

「あ、ありがとう。」

思わず瑠唯もてれながら挨拶をする。

すると後ろの方からにぎやかな声が聞こえてきた。

「あー！まま！るーくん！！！！」

嬉しそうな女の子の声が聞こえがばつと瑠唯に抱きついた。

「一樹、ただいま」

「るーくんおかえりー！！！！」

「七海、瑠唯、早かったな・・・美羽は？」

その後ろから香南がやってきた。

「美羽はテニス部を覗いて帰るそうです。」

「そうか。二人ともお疲れ様。今雅さんがお茶入れてくれてるから。」

「えっ手伝ってきます!!」

そしてばたばたと七海は奥のほうへ入っていった。

「瑠唯、おめでとう。」

あらためて香南は瑠唯にお祝いの言葉を述べた。

「ありがとう。」

「あとからその、写真七海に見せてもらうの楽しみにしてる」

「うん。あ、ななちゃんのも撮っておけばよかったかな?」

二人で会話をしているとメンバーも会話に入ってきた。

「ななちゃんのはすでに香南シャメに撮ってるはずだよ。でしょ?」

「・・・まあ、」

「ああ、そうだったんだ。」

いつの間にも思ったがそれを口に出さない瑠唯は少しだけ大人になったなと実感した。

「ところで瑠唯、お前入学祝何がいい?」

「え?」

突然の燎の言葉に驚く。

「そうだねえ。美羽は新しいテニスラケットだっただろう?君は何がいいの?」

「えっと、僕は特に・・・」

瑠唯がうつむくと夏流がぶーと頬を膨らませた。

「もったいないーい!こんな時にしか言えないよ?じゃないと僕の欲しいもの買っちゃうよ?」

その言葉に香南が眉をひそめる。

「・・・なつの欲しいものってなんだよ」

「ギター」

「却下。瑠唯、いつになってもいいから欲しいと思ったもの言えよ。メンバーから俺と俺と七海からの二つ分あるぞ」

「う、うん・・・」

会話が終わると奥の方からお茶が入ったと声が聞こえてきた。

「よし、じゃあもう少しだけ仕事するか。」

「おっけー。あ、瑠唯はななちゃんたちと見学でもしてなよ。香南も気合入るし」

ニヤニヤいう夏流に香南がにらむ。

「あ、うん。」

返事をし、一樹と一緒に奥へ入ると一つの机にお茶が用意されていた。

「やあ瑠唯君。今日はおめでとう」

「ありがとうございます。」

雅が瑠唯のいすを引きながらお祝いを述べる。

目の前を見るとツアーの練習なのか複数のギター、ベースが並び、燎がドラムチエックをしていた。

「香南、ここのキー原曲のままでもいいの？」

「ああ。最初だし大丈夫だろ。」

そして一度流すのか夏流がギターを鳴らし周がベースを鳴らし燎がドラムを叩く。そして香南の声が入る。

この心地よい世界に何度引かれたことか。

瑠唯は今日もこの世界に取り込まれた。そして心が少し沈むのを感じていた。

やりたいこと、それは自分にとってとても遠いものだと瑠唯はわかっているからだった。

新しい世界は

君にどんなものを映す？

l u c i d   l o v e   0 2

「でね、先輩ってば早速素振り千回だーってさせるんだよ？信じられる?!」

「すぶり!みーくんすぶり!」

「そうそう、素振り。一樹正解」

入学式から一週間、久々に香南も揃っての晩ご飯だった。

早速美羽はこの一週間であったテニス部での出来事を鮮明に話す。

「けど、美羽の実力を見込んでのことだろ？実力を認めてるんだし、いいことだろ？」

「うっ・・・まあ、そうなんだろうけど・・・」

美羽は照れながらぼそぼそとご飯を食べ始めた。

「瑠唯は学校どう？部活とかいいの見つかった？」

七海が期待を込めて聞く。この一週間なるべく部活見学をさせるために家の手伝いはしなくていいと伝えてあったのだ。

瑠唯は一瞬驚くものの苦笑いをした。

それを見た美羽が隣から口を挟む。

「それだったらテニス部のマネージャーしたら？マネージャーは頭イイヤツ欲しいっていてたし、瑠唯ぴったりじゃん」

瑠唯は運動は出来ないが頭がとてもしいい。高校の試験もほぼ満点合格で入学できるレベルだった。

それを知ってる美羽は少しでも何かあればと提案する。

「マネージャー・・・」

「俺も瑠唯にだったらいろいろ頼めるし。」

美羽の言葉に瑠唯は少し悩んでいる様子だった。

「もしなかったら、一度見学行こうかな・・・」

「おう！待ってるぞ！」

「るーくん、まねーじゃー！」

「まだ時間はあるし、好きなのを探したらいい。」

「・・・うん。」

香南の笑顔に少しだけほっとした瑠唯だった。

翌日の朝、美羽はすでに朝練習へ行っておりいなかったが、香南が

リビングにいた。

「にいちゃん？」

「瑠唯、おはよう。」

「今日朝早いから瑠唯と一緒にご飯食べるそつよ？」

「そ、そつなんだ。」

「今日は朝和食だぞ。瑠唯好きだろ？」

「うん。ありがとう。」

ご飯と一緒に食べ準備仕度を終え玄関まで行くと香南が弁当を持ってきた。

「え？」

「これ、今日俺が作った。その、頑張れ。」

小さなエールとともに渡された弁当に瑠唯は少しだけ泣きそうになった。

僕は、こんなことされる資格ないのに

「あ、りがとう。」

「行ってらっしゃい。」

「行ってきます。」

小さな声で言つと学校へ向かった。



昼ごはんはクラスの中でひっそりとご飯を食べていた。

瑠唯は家族やメンバー以外への軽い対人恐怖症を起こしていた。

香南やメンバーがあれだけ学校行事に来ているのだ。

芸能人だとばれていないはずがなかった。

そしてそのことを全く言わずそのまま付き合ってくれる友達もいたが、徐々に周りが変わりつつあった。

腫れものように扱う人もいれば羨ましいと媚を売ってくる人たち。親がファンだからとサインをせがむ人もいた。

美羽はそれを上手にかわし持ち前の明るさでそのことを吹き飛ばしクラスの中心人物になれた。

しかしもともと人と接するのが苦手な瑠唯は徐々に萎縮し始める。

中学のころには美羽はテニスを始めさらに人気を高める。

香南の事を言われ、美羽とは比較され瑠唯は二人は全く両極端になり途端に瑠唯は怖くなった。

香南のように吐き気がするわけでもないが人と話すとどうしてもどもってしまうのだ。

中学生の友達も美羽を介してやっとできたと言っても過言ではなかった。

高校に入ったからには美羽に迷惑をかけたくないと思いクラスでご飯を食べると美羽に伝えてあった。

しかし、今まで出来なかったことが突然出来るわけもなく、なかなか人に話しかけることが出来なかった。

『頑張れ』

にいちちゃんが応援してくれたんだ。もう、すこし。

「お、お前の弁当メツチャうまそー!!!」

「え？」

下にうつむいていた瑠唯に話しかけてきたのはクラスでも元気な男だった。

「何入ってるの？スゲー豪華じゃん。」

「えっ……」

突然話しかけられパニック状態の瑠唯に男は関係ないように話を続ける。

「俺の弁当の具と物々交換しようぜ！」

男は前のいすに座り込み瑠唯の机に自分の弁当を置き始めた。

「あ、うん」

瑠唯は照れながらも急いで弁当をあけ始めた。

「俺、立花翔たかはな しょう。お前なんて名前？」

「ぼ、僕、日向瑠唯って言うんだ。」

「日向?!」

突然びっくりしたような声を出すとそうかと納得していた。

「うわーお前もしかして日向美羽の兄弟？」

「あー・・・うん。」

瑠唯はやはりかと目を瞑る。

美羽はテニスが上手いだけではなく性格も明るい。

中学生の頃も何度も女の子に告白されてるところを見た。

瑠唯にも美羽にラブレターを渡してくれと頼む人がいるほどだった。

それが高校で噂にならないはずがなかった。

「あ、わり！そういうの言われるの嫌だよな。」

「いや、大丈夫。それに…その、美羽は凄い、やつだし。」

あれだけ自分のやりたいことを見つけて  
ちゃんと実行に移してる。

「僕は、僕の近くには好きなことを、好きと言えるほどしている人がたくさんいるんだ。美羽もそのうちの一人で、凄いと思う。」

初めて話す人に何を話しているのかとはっとする。

「う、ごめ

「ならお前だつて探せばいいじゃん！」

笑顔で翔は言った。

「けど、「そんな瑠唯にぴったりの部活紹介してやる！」・・・え？」

「今日の放課後ぜってえ残れよ！連れて行ってやるから」

翔が笑顔でそういうとちょうどチャイムが鳴り翔は席に戻っていった。

放課後残っていると翔が傍へやってきた。

「残ってくれてありがとな！じゃあ行こうぜ」

「ま、待って、あの、どんな部活なの？」

運動があまり得意ではない瑠唯は運動部だけは避けたかった。

「それは着いてからの楽しみだな！ちよと五月蠅いけれど慣れれば何とかなる！」

「う、五月蠅い・・・？」

ますます不安になる。五月蠅いつてなんだ？

翔の顔がとても楽しそうだが瑠唯の顔はますます沈んでいくばかりだった。

不安になりながら着いていくと、つい先日掃除に来た場所だった。

「おんがく、しつ・・・？」

しかもとても古い。

なぜ？

ますます不思議な瑠唯だった。

03

彷徨い歩いていた

僕の心は

よじぢく

辿り着いた

l u c i d   l o v e   0 3

「おう、まあ入りなつて！」

ニコニコしながら翔はびっくりして立ち止まる瑠唯を部屋の中へ入

れる。

すると馴染み深い音が瑠唯の耳に聞こえてきた。

古い教室に響くその音は、部屋をみしみし言わせるけど、とても大好きで、

「ドラム…ベース…？」

なぜ？

瑠唯は頭をかしげるばかりだった。

翔はそんな瑠唯をお構いなしに話し始める。

「おう！正解！！ここ軽音部の部屋！俺バンド組んでんだ！吹奏楽部とかと違ってやっぱこういうところしか貸してもらえてねえけど音響くし、最高の場所なんだぜ！」

軽音部

バンド

それがあることに瑠唯は驚いた。

「おい、翔うつせえぞ」

「翔、お客さん？」

部屋の中から出てきたのはとても笑顔が柔らかい男の人ととても人相の悪い男の人だった。

「あ、せんばーい！早速連れてきました！ー！」

ニコニコしながら翔が瑠唯を前に出す。

「は？なんだよこいつ」

人相の悪い男が瑠唯を睨みつけてくる。

瑠唯は思わず肩を震わせる。

「えっと、その、」

「こら。睨むな。ごめんね、もしかして翔が何も言わずに勝手に連れてきたのかな？」

はいそうです、とも言えず下にうつむく。

「とつぜんごめんね。そしてようこそ軽音部へ。俺は部長の佐野明さのあきひです。隣の人相の悪いやつは高橋龍之介。君のお名前伺ってもいいかな？」

「えっと、日向瑠唯と言います。」

「日向…？」

龍之介が眉をひそめる。

「先輩こいつ日向美羽の兄弟らしいつすよ。」

「ああ、噂の…」

明は少し考える様子だったがすぐに笑顔に戻った。

「んーじゃあ瑠唯って呼んでもいいかな」

「えっあ、はい…」

よかった美羽について何も聞かないんだとほっとする。

「瑠唯はバンドとかに興味がある？」

「バンド、」

頭の中に音が響く。

そこにはとても大好きな人たちがいて、演奏している。とても、楽しそうに。

「僕は、その、anfangと言うバンドが好きです」  
この言葉に3人は驚いたように目を見開きとても嬉しそうな顔を  
する。

「まじで!?!」

「え?」

なぜ嬉しそうな顔をするのかわけがわからないと瑠唯は首をかしげ  
る。

「ちょうど良いじゃん! やっぱ瑠唯誘って正解!」

「はあ…」

「瑠唯、俺たちのバンドに入ってくれよ!」

「へ?」

頭が一瞬動かなくなった。

俺たちのバンドに入ってくれよ…?

「ど、どういう…」

「いや、俺らのバンドこの通り3人しかいなくて、数が少ないんだ  
よね。」

明が苦笑いをする。

「全員anfang好きなやつらばっかだし、きつとやりやすいと  
思う。」

「俺ら教えるし!お願いっ!」

音楽は僕の手が届かない遠いものだと思っていた。  
兄ちゃんの作るものは神の領域で



僕には到底近づけないもので

「いいの、かな」

「え？」

「僕がやっても、良いの、かな」

いいのかな？

あの言葉に僕はずっととらわれていて、  
けど僕は、僕は、

「良いに決まってるんだろ」

ハツと前を向く。みると龍之介が瑠唯の方を向いていた。

「お前がやらなくて誰がお前の音を作るんだよ。」

「僕の、音？」

瑠唯は首をかしげる。

その言葉にクスリと明が笑う。

「うん。君の音は君しか作れないよ。それに君はとても音楽をやり  
たそうだ。」

翔に隣から肩をたたかれる。

「バンド、一緒にやるうぜっ？」  
ぎゅっと唇をかむ。

僕は、この気持ちに応えたい。  
僕自身に正直になりたい。

「やらせて、ください！」  
ガバツと頭を下げる。  
しばらくするとクスリと笑う声が聞こえる。  
「こちらこそ、よろしくおねがいます。」  
「よろ、しく」

「一緒に頑張ろうな!!!」  
その声に前を向くと3人とも笑顔で迎えてくれた。  
思わず涙が溢れそうになる。  
僕はここで、やりたい。  
瑠唯は切実にそう思った。

「と、ところ、でどんなバンドなの？」  
「ん？anfangのコピーバンド！」  
「へ！？」

”anfangのコピーバンド”  
まさかこのような形で瑠唯の音楽生活が始まるとは思ってもよらなかった。

### 03 (後書き)

と云うわけで瑠唯のやりたいことと云うのはバンドでした。

いつもの僕と

心の奥底の僕

どちらを信じる？

l u c i d   l o v e   0 4

軽音部に入部をして一週間。

瑠唯は少しずつメンバーに慣れていった。

もともと人と話すことが苦手であったが翔がとても気さくな事、明が話しやすい内容を瑠唯に聞いてくれること、龍之介が根はいい人だと言つこともあり着実に話せるようになっていた。

「お前、anfanningの中でなんの曲が好き？」  
休憩時間ふと龍之介が尋ねてきた。

龍之介も初めは話してることがなく、見た目がヤンキーでいつも睨んでいるような顔をしているため嫌われているのかと思っていたが、明が後から教えてくれた。

『彼はシャイなんだ。だから、そうだね。anfanningの話をしてらいつぱい話をしてくれるよ』

早速話しかけるととても嬉しそうにanfanningのことを話し始めた。

こんなにanfanningのことを好きでいてくれる人を久々に見た。唯はとても誇らしく、嬉しくなった。

それからというものの、龍之介は少しずつanfanningの話題を通して瑠唯に話しかけるようになった。それが彼なりのコミュニケーションの取り方だった。

「僕は、えっと、backbone in the earthが一番好きです」

「ああ、あのアルバムは凄かったな。全部いい曲で、何度聞いてももう一度聞きたくなるんだ。あれからほんとanfanning変わったよな……」

「そ、そうですね」  
多分、雅さんもそう言っていたし。心の中で冷や汗をかきながら答える。

『schatz』は香南が日向家族にプレゼントしてくれたアルバム

ムで一人ずつを歌った曲が入っている。今でもたまに引つ張り出して美羽と七海と3人で聞いている。

直接こうやって褒めてもらえるって、嬉しいな。

瑠唯はまた心が嬉しくなった。

「そういえばさ、」

ふと気付いたように翔が会話に入ってくる。

「カナンってこのへんに住んでるんでしょ？」

「は?!」

「え?」

瑠唯は思わず肩を震わせる。

龍之介はとても嬉しそうに体を前のめりに翔に話しかけた。

「おい、それ本当か!？」

「いや、噂ですよ~!」

「まあどこにでもそういう噂があるしきつとその一っだから気にしない方がいいんじゃないかな？」

「けどどうします!?!突然学校前の道で出会ったら!」

「俺だったらそっこうサイン貰いに行く!!!」

明がなだめるが龍之介の興奮はやまずその話で盛り上がっていた。

瑠唯はカナンが自分の家族であることを話していない。

そして逆に家族にも自分が軽音部に入っていることを言っていないかった。

『ななちゃん、その部活入ったから放課後遅くなるけど、いいかな？』

食事中報告すると七海はそれはそれは嬉しそうに笑顔になった。

隣にいた香南もとても嬉しそうに頭を撫でてくれた。

『まあよかった。』

『何部入ったの??』

美羽がとても嬉しそうに尋ねてきた。

しかし、ここで本当のことを言えず思わず顔をこわばらせてしまった。

『えっと、その、美術…ぶ』

つい嘘を言ってしまった。

その時美羽がどんな顔をしていたか、下を向いていた瑠唯にはわからなかった。

しかし、瑠唯は少なくとも香南と七海の前では言えなかったのだ。

絶対幻滅する。

今までも全然いい子じゃなかったのに。

それだけは絶対嫌だ。



「で、瑠唯だったらどうする?」

ふと翔に話しかけられ意識を戻す。

「え?」

「だーから、カナンが目の前に現れたらだよ!!!」

興奮しながら龍之介が嬉しそうに話しかけてきた。

「えっと、見るだけで、」

えへへと言いながら答える。

「お前、夢ねえな…」

龍之介は少し不満そうだった。

「まーま、ところで瑠唯くんはanfangの今度のツアー行くの?」

「へ?」

先日練習していたツアーがもうすぐ始まるうとしていた。

確か、七海や美羽、一樹がとても楽しみにしていたのを思い出す。

「行くと、思います。」

「まじで?!」

翔と龍之介がとても驚いたようにしていた。

「お前、よくチケット手に入ったな…」

「あれ、なかなか手に入んないって話題だったんだぞ。俺らも誰も取れなかったし」

「え、」

そう言えば、瑠唯はanfangのチケットはかなりのレアものになるのを忘れていた。

かなり不思議そうな顔をする二人をよそに明がニコニコと話しかけてきた。

「そっか。じゃあ今回はちょっとだけいつもより演奏に注目して聞いてみて」

「は、はい!」

少しずつ瑠唯の周りが変わりつつあるのだった。

「お疲れさまでーす！」

お互いをねぎらう声が飛び交うコート。今日のテニス部の長い活動も終わりを迎えていた。

美羽は汗を拭きながら先輩に挨拶をする。そしてふと思い出した。

「せんぱーい」

「ん？なんだ??」

今日練習をしてくれた先輩に挨拶をしたあとちよつと尋ねてみた。

「あの、美術部ってどこで活動しているんですか？」

「びじゅつぶう??」

「はい。俺の片割れが入ったらしいんですよ。」

「片割れってあのイケメン秀才か？」

「はい。」

瑠唯は知らないが瑠唯も入試ほぼオール100点で入ってきたイケメン秀才としてとても噂の人間だった。

ただ美羽と違って行動的でないため顔は知られていなかった。

「けど美術部って今学期あんまり活動してないんじゃないか？」

隣から違う先輩が話しかけてきた。

「だよなあ…? やってても個人活動とかで居残らないだろ」

「・・・」

そうこの違和感。

美羽は薄々感じていた。あの瑠唯のよそよそしさ。  
瑠唯、俺にも何か隠すの？

## 04 (後書き)

曲についてはclarity loveを見ていただくかその最後のあとがきをご覧ください。

ずっとずっと

君と僕が君と僕であり続けられると

そう思っていた

l u c i d   l o v e   0 5

「いただきます」

「「いただきます」」

「きまーす！」

今日の夜は香南がいないため4人だけの食事となった。

ひたすら部活で運動をしてくる美羽はよく食べるが、瑠唯はあまり食べない子だった。



どうしようと思っているとノック音が聞こえてきた。

「るーいーおれー。あけるー」

やはり美羽だった。空けようかどうか迷っているため息が聞こえてきた。

「ななちゃんにはばれてないから大丈夫。」

ぼそつと伝えてくれた言葉に少しだけ安堵する。

「美羽、ごめん。ごめん、なさい」

家族にあまり嘘をついたことなんてなかったが特に美羽には一度もなかったのだ。

それをこんな形でついでになってしまうことになり瑠唯自身とてもつらかったのだ。

「駄目、許さない。」

「へ？」

美羽の言葉に目を見開く。

「俺、怒ってるんだから。明日、部活見に行くからね！教室で待っててね」

「ええっ？！ちよっみ、美羽！？」

「じゃあおやすみ」

ドアの向こうの気配がもうなくなっていた。

う、うそでしょ。

瑠唯はさらにうずくまった。

翌日、どうしようもないように思っているうちに放課後になってしまった。

「るいー行こうぜ！」

「あ…翔、」

今日も一緒に行くつもりで翔が話しかけてくれたが、昨日言われたこともあり苦笑いをする。

「ごめん、その、用事があつて、先に行つてもらつてもいいかな？」

「ん？おっけー」

早めにこいよーと言っているうちに教室の前がざわざわし始めた。

これは、もしかして、

ドアを見ると美羽がいた。

「るーい 連れていつて」

それを見ていた翔がきよとんとしていた。

「今日どこか行くのか？」

「いや、えつと」

どう説明しようか迷っていると美羽がずっと前へ出てきた。

「瑠唯の友達？はじめまして、俺2組の日向美羽！」

「知ってる知ってる！！お前ちよう有名人だもんな！俺瑠唯と同じクラスの立花翔！部活も一緒なんだ」

部活という言葉に美羽が即座に反応する。

「ふうん」

「ちよつと、美羽」

瑠唯の言葉を無視し美羽は翔に話しかける。

「俺もさ、部活見に行つていい？」

「お、いいぜ！見学大歓迎！」

案内すると言つて翔が先を歩き始めた。

「美羽、その」

「話を見てから聞くから。」

美羽もすたすたと歩きはじめ、瑠唯もそれについていくしかなかった。



ついた先に美羽が眉をひそめる。

「音楽室？」

しかも、古い方。

不思議に思いながら部屋に入っていくとドラムやベースの音が聞こえてきた。

「おめえらおせえぞ」

「すんませーん！」

「ご、ごめんなさい……」

ドラムをたたいていた龍之介がこっちを向きながら話していた。  
「って、お前誰だ？」

美羽が睨まれ美羽は苦笑せざるを得なかった。

「えっと、双子の兄の美羽です。見学をしにきました。」

「はじめまして。」

へへへと笑顔で挨拶をする。

する遠くからベースを持った明がやってきた。

「有名なテニス部ホープじゃないか」

「どうも、」

「もしかして君もバンドに興味があるのかい？」

「バンド……？」

少しずつ確信に近づく頭に翔が答えを出す。

「そう俺ら軽音部！バンド組んでんの！」

「……なるほどねえ」

「……」

美羽は瑠唯を見るが瑠唯は下を向いたままだった。

「まあ、コピーバンドだから曲を楽譜に起こすところからやっているんだ。最近一つやっつと完成したんだよ」

「へえ、見せて」

楽譜を見せてもらつとそこには『black kiss』の文字が。

「まさか、anfang…?」

美羽が瑠唯の方を向くと瑠唯は今にも泣きそうな顔をしていた。

「ああ。俺ら大ファンでね。瑠唯くんもファンというから・・・」

「部長、練習しましょう!!」

もついたたまれないと瑠唯が練習を促す。

そつだな、とそれぞれ練習に入った。

練習が始まると美羽が今まで見たことないぐらい瑠唯は生き生きしていた。

困った顔も楽しそうな顔もあり見せたことのない瑠唯がここでは自分でいられる場所になっているんだと美羽は思った。

日も暮れかけた頃翔が突然提案してきた。

「なあ！最後に美羽に聞いてもらおうぜ！」

「へ!？」

瑠唯は思わず口に出してしまった。

「そつだな、最近ようやく一曲音としてもできあがってきたしな。龍之介もやりたそつにうなずく。」

それに美羽は思わずにやりと口端をあげる。

「ぜひお願いします」

「み、美羽」

美羽の言葉に瑠唯は泣きそつになる。

「どうして」

「ななちゃんに言うよ?」

面白そうに笑いながら脅す美羽にこれはもうやるしかない抵抗をやめた。

「ちゃんと、”本気”でやってよ?」

「”本気?”」

メンバーの3人は頭にはてなを浮かべた。

演奏が始まると今まで眉をはの字にしていた瑠唯の顔つきが変わる。そしておたけびのような冒頭が始まった。

その歌声にメンバーは圧倒されていた。

今まで練習した瑠唯じゃないのだ。

表現力も音程も動きもそう、完璧なのだ。

先より高く

僕のうつつわは

君を責める

僕の誘惑で

君を撫でる

新しいキスを君に送ろう

愛しい君への忠誠を誓って

メンバーたちの興奮は終わっても止まらなかった。

「皆、驚いてたね」

笑いながら美羽が言う。

「だって、練習って止まるし」

「あーおもしろかった。サプライズ大成功って感じだね。」  
笑い終わると近くの公園に寄った。

「それで？なぜ俺にまで秘密にしたわけ？」

突然真剣な目つきになる美羽にびくつと震える。

「そ、れは」

「それは？」

ぎゅつと唇をかむと泣きそうな顔で前を向く。

「美羽は、初めてにーちゃんたちとカラオケ行った日を覚えてる？」

「カラオケ？」

美羽が眉をひそめながら考えるとそう言えばそんなことあったなと思いだす。

「その時に僕凄いほめられたんだ。それでななちゃんが瑠唯も歌手になったらどうしようって言ってただけど、にーちゃんが」

『俺としては賛成できないけどな。』

『あの職業になることが反対なんだ。もっと、瑠唯ならいいものに』

なれるよ。』

「僕、ずっと近づきたくて、けどこの言葉がずっと引っかかってて」  
「……」

「だから、とくにななちゃんやにーちゃんには言えなくて、美羽とも食事の時間ぐらいしか会えないから」

この言葉がずっと苦しめていた。

きつとたくさんの辛いことを経験してきたからこそ言ったんだと思う。

けど、瑠唯がしたいことはそれだったのだ。

どうしたらいい？言えなかった。

「そっか。」

「美羽、ごめん」

瑠唯は頭を下げた。

すると美羽は無理矢理顔をあげさせた。

「あやまるなよ、瑠唯。俺も気づいてやれなくて悪かった。」

「美羽……」

「ななちゃんやにーちゃんには、まだ言わないんだな？」

コクンと頷く。

「じゃあ、まあ、手伝ってやるかあ。」

「美羽」

「あ、ライブするんだったら絶対呼べよ！俺は瑠唯のファン一号だからな。」

「あり、がと」

久々に安心したのか瑠唯が大粒の涙を浮かべ声を出して泣き始めた。美羽が頭を撫でてやる。

ごめんね、ありがとう。

双子に生まれてよかったと瑠唯は改めて思った。

## 05 (後書き)

瑠唯達が香南と一緒にカラオケ行く話は clarity love  
番外編の方に載せております。実はこれを書く序章として書きま  
した。

この暖かさは

そう

君のために

l u c i d   l o v e   0 6

あれから一週間後 anfang のツアーが行われた。  
もちろん美羽もその日は部活をそこそこに切り上げ皆でライブ会場  
へ行った。

「いつき、みーくんとするーくんのあいだにすわる!」

「あつらーいいねー樹! うらやまし〜な〜」

もちろん琴乃も一緒にやってきた。

琴乃は最近結婚した。



社内恋愛だったらしい。

琴乃の事だからイケメンで意志の強い男と結婚するかと思っていたが、結婚したのは弱弱しい眼鏡男。

世の中どう何か転ぶかわからないなと七海は思った。

「玲人さんれいじんもいらっしやれば良かったのに。」

玲人とは琴乃の旦那さんである。

一応チケットは玲人の分と二枚渡してあったのだ。

「んーなんか見たくないんだって。」

「え？」

琴乃の方を向くとペンライトをばっちり準備しにこつと笑っていた。

「こつやってカナンとかを応援するでしょ？ 妬いちゃうから行きません！ とかわれた。」

「そ、そっか」

ごちそうさまと心の中で呟く。

以前琴乃が玲人を連れて家に来たことがあった。

そして七海の旦那が琴乃の大好きなバンドのメンバーだと言うと突然「あなたには負けません！！」と宣戦布告された。

香南としては久々に男友達ができるとしても全く仕事と関係ない人と友達になれるのを緊張していたのに突然なんだと玲人を睨む。

すると玲人は怯えたように琴乃の方を向く。

香南は仲良くなりたいたいに玲人がこつであつたは全く意味がなかった。

それからというものの二人が会うたびに玲人は香南を威嚇するが全く香南には無効化であった。

香南が一生懸命話しかけても玲人はキリッと香南の方を向く。

「ぼ、僕はあなたと対等になるまで、はなしましえん!」

これは駄目だとしてしばらく距離を置くことになった。  
香南はとても残念がっていた。

ふと意識を戻し子供たちの方を向く。

双子の真ん中をご満悦に楽しんでいる一樹とその両隣りで久々のツアーを楽しんでいる双子たち。

高校に入りようやく二人とも好きなことをしているのを七海は内心ホッとしていた。

好きなことをしてたくさんの事を学んで欲しい。

勉強ができなくてもその中で自分の生きる道を決めると言うことを考えて欲しい。

七海は笑顔で双子を見つめていた。

SEが始まり突然花火が上がり照明も消える。  
するとドラムが鳴り始めた。

そしてギター之音が入りベースもはいる。

「いくぜええおめらああ!」

叫ぶように香南が言うと曲が始まった。

『じゃあ今回はちょっとだけいつもより演奏に注目して聞いてみて』

先輩の言葉を思い出し改めて演奏を聞いてみる。

やはり軽音部とは全く違う。

まず迫力が違うのだ。

そしてコピーはコピーで実際演奏されると音が足りない。

やっぱりもつと聴き込んで演奏しなければならぬ。

瑠唯は改めて思った。

「どうも、anfangです。」

2、3曲終わると香南が話し始めた。

ファンたちはわーと盛り上がると照れたように香南は頭を掻く。

最近のライブでは香南もMCをするようになりおどおどしながら近況報告をする香南にファンが癒やされると言う感じになっていた。

「えっと、春になったな。」

そーですね！とまるで某番組のようにファンが言葉を返す。

「新学期って俺もあまり覚えてないけど、凄く、特別な感じになって新しいことを始めるのに、良い季節だなんて思った時期があった。今年は何にしようか」

しばらく黙るとメンバーが笑い始めた。

「香南君は何を始めようかと思ったのかな？」

「いつちやいなよ」

顔を真っ赤に染めながら香南が前を向く。

「がーで、にんぐ…」

一瞬ドームが静まったかと思うとええええとファンの驚く声。

「か、カナンガーデニングなんかしてるの？」

琴乃が七海に聞くと苦笑しながら答える。

「えっと、私が種をもらってはまっちゃって、一樹と一緒に一生懸命育てると香南さんも参加し始めて」

「あ、なるほどね」

琴乃は納得した。

「花って面白くて、良いなと思ってプランターに植えてる。今はえっと、チューリップとか。」

「こいつ、花に話しかけてるんだぜ。すっげー気合の入れよう」  
笑いながら燎が答える。

香南はメンバーを睨みながら続ける。

「他にも、運動しようかとテニスしてみても思ってる。」

そう言った途端に美羽の顔が真っ赤になる。

「にーちゃん、だからうちのラケット増えてたんだ。」

「みたいだね…」

美羽と瑠唯が苦笑いをする。

「俺も運動してー！テニス面白そうだもんな」

「テニスは案外体力いるんだよ？香南君にできるかなあ」

「え、何アマネテニスしたことあるの？」

「中学の時にやっていたんだよ。」

まさかのやってました発言に一同驚く。

「えっホントに…！？」

ナツルが尋ねる。

「まあ、音楽楽しくてやめたけどね」

そうなんだと驚きを隠せないようだった。

少し落ち着くお再び香南が話したす。

「あとは、絵とかもちよつと興味がある。」  
びくつと瑠唯の方が上がる。

美羽がすかさず瑠唯の方を向いた。

そう、ずっと黙ったままではられない。

にーちゃんにも、ななちゃんにも。

瑠唯は唇をかみしめる。

それからのライブもとてもよかったがこの一言で瑠唯はとても集中できるものではなくなった。

ライブが終わり楽屋へ皆で挨拶をしに行く。

「るいるいとみうみう〜！そしていつちやーん！」

「なつちゃん！苦しいよー！」

夏流が一樹を抱きしめる。

「皆さんお疲れ様です！」

「ななちゃんも、ありがとう」

笑顔で周がエスコートする。

「おい周、いい加減七海を離せよ」

「でたー。香南の嫉妬。」

無理矢理引きはがそうとする香南と後ろから突っ込む燎。

そんなメンバーを双子は笑いながら見ていた。

「どうだった？」

香南が双子の方へ来て話し始める。

「よかったー！新曲のcrazy rabbitだっけ？あれもす

げーよかった！」

「そうか。それはよかった。」

美羽と香南が話しているのを瑠唯はニコニコと眺めているだけだった。

そんな瑠唯に香南は眉をひそめる。

「瑠唯、大丈夫か？」

「へ？！」

「ぼーっとしている。熱でもあるのか？」

おでこを合わせ熱を確かめる。

「熱は…ないようだな」

「だっ大丈夫！多分ライブ凄すぎて興奮疲れたと思う！」

「そうか。」

ならいいがと引いた香南に瑠唯はほっとする。

「皆打ち上げー。」

「はいー」

雅が呼びに来ると夏流が勢いよく返事をした。

「あっでは私たちはこれで。」

七海が挨拶をする。

「気をつけて帰れよ。」  
「はい！」

帰り道皆の一番後ろに双子はいた。  
すると美羽がぼそつと瑠唯に声をかける。  
「瑠唯、考えねえとな。」  
「うん…」

わかってるけど  
どうしたらいいのか分からず空を見上げる。

星たちは全く輝いているように見えなかった。

## 06 (後書き)

ブログ作りました！リンクはTOPページにあります。  
くわしくは活動報告に書いてあります。



07

一つ前を向く力

それは僕にとって

希望の光

l u c i d l o v e 07

ツアーもようやく終わり少し落ち着いたと思ったたらすぐにシングルに向けて動き始めた。

そしてその休憩時間、やたら香南がパソコンを使い何かを検索していた。

何かと思い夏流が覗きこむ。

「かなーん何調べてるのー？」

「ん・・・」

顔をあげ画面を見せてくれる。

そこには絵を描く画材が載っていた。

「どうしたの？絵でも描くの？」

「いや、瑠唯の・・・」

そして再び画面を見始める。

「あいつの入学祝いに送ってやるうかと思って・・・何も言ってこねえし・・・これだったら消耗品だから使えるだろ？」

「うーん・・・」

確かに、夏流は納得した。

しかし心の奥底で引つかかるものがあったのだ。

あの目、とても似ていた。

「香南、それはちょっと待った方が良いかも・・・」  
「・・・は？」

香南の不思議そうな顔に夏流は思わず苦笑いをした。

「新曲、やっぱり歌ったのか…?!」

「うん。」

「まじかよ!!! 行きたかったああああ!!!」

ツアーの後日、部活ではあのツアーのことを話していた。

セットリストを述べるとそのたびに聴きたかったと何度も後悔しているようだった。

最後に新曲を披露したのは知っていたらしく、そのことについて何度も聞かれる。

「今回はアマネさんの曲だったよ。とても、面白い曲だった。」

「だろうな。今回もエロそ…」

「crazy rabbitって題名からしてそうだもんな…」

「彼の曲の作り方は独特だしね。早くCDにならないかな…」  
そして瑠唯がまたおずおずと話します。

「あの、今回僕演奏を聞いてみました。」

「ああ、どうだった?」

明がニコニコしながら尋ねる。

「やっぱり、違います。音の数が…」

「そう、か。」

「まあほんとコピーすんの難しいからなあ…」

「だからこそ挑戦し甲斐があるんだけどな。」

anfangはCDでもとても難しい音を紡ぎます。

聴いていてもコピーしにくい。ライブで直接見たとしてもCDと違った演奏をするため聴いていてもわからないのだ。

「けど、聴けます。僕も、だから、頑張ります!!!」

あのライブを見て瑠唯は思った。  
anfangは本当に凄い。  
けれどももっと、もっと近づきたい。

「よくぞ言った瑠唯！」

翔が瑠唯の肩をたたきながら言う。

「・・・え？」

「実はな、俺の知り合いの先輩が今度ライブするんだけどそれに繋ぎで2、3曲やらないかって誘われたんだ。」

「おい・・・」

「それって・・・」

「部長にはもう言っているんだけど、お金はいらないらしいし、やってみねえ？」

ライブ...？

自分、が...？

あまりに突然のことで瑠唯は呆然としていた。  
自分にとってライブとは夢のまた夢でそれを自分ができるとは思ってもいなかったのだ。

「やりてえ!!!おい明!!!」

「俺も賛成だよ。こんな機会めつたにないことだし。やらせてもらいたい。」

「瑠唯は？瑠唯はどうだ？」

「僕は…」

脳裏に浮かぶのは先日ライブの事。

そして香南の笑顔。

頑張れ

「僕も、やります!!!」

その言葉に3人は大きくうなずいた。

それからというものの朝早くから夜遅くまで練習に明け暮れた。

ほぼテニス部と同じ時間で動いていたため行き帰りは美羽と一緒にだった。

「えっライブ!?!」

「うん、」

「凄い…チャンスじゃん!俺絶対行くからな!」

「え!？」

瑠唯は驚いた。まさか本気で行くと言うとは思わなかったからだ。

「き、来てくれるの…?」

「あつたり前じゃん!俺瑠唯のファン第一号だもん。けどさ…」

美羽が突然真剣な顔つきになる。

「ななちゃんたちに、いうの?」

その言葉に瑠唯は顔をしかめる。

「まだ、お願い、いいたく、ない。」

「…」

「わかってる。凄くわがままだって。だけど。」

「…分かった。」

美羽が悲しそうに笑う。

「ごめん。」

「いや。それよりも、頑張れよ。」

「うん。」

ライブの前に中間テストが行われた。

「瑠唯、テストどうだった?」

「今回は…あんまり…」

翔から聞かれた質問に瑠唯は苦笑いするしかなかった。

全く勉強していない状態で迎えたテストはほとんどできなかった。

夜は夜で勉強をしているがそれでも今までどおりにはいけない。

それは瑠唯にもわかっていた。

罪悪感が付きまとうものの心のどこかではそれでも音楽を練習したいと思う気持ちが大きかったのだ。

とにかくライブを成功させたい。

その一心で練習したライブ。  
とうとう当日になった。

## 07 (後書き)

えーと大分変えました。



08

一歩一歩踏みしめる

これは僕への挑戦

僕への強い願い

l u c i d  
l o v e  
0 8

とうとう当日になった。

夜遅くなるためばれない様に美羽と二人で翔の家に泊めてもらうことになった。

「じゃあ行つてきます。」

「いつてらっしやい、あつあちらのお家に渡すお土産持った？」

「もったもった！大丈夫だつてななちゃん！」

七海は持たせた土産を忘れていないか再三確認する。

今まで双子は友達の家泊まったことがないため七海も相手に迷惑にならないためにはどうしたらいいのか一生懸命だったのだ。

「ついたらまずよろしく伝えてね。」

「うんわかってるって。」

「いつきもいくうー！」

七海に抱かれた一樹がぐずり始める。

「ごめんね。帰つたらいつぱい遊ぶから。」

よいしょと荷物を持つと玄関の戸を開ける。

「じゃあ、いつてきます」

「いつてらっしやい」

ピンポンを鳴らすと出てきたのは翔だった。

「やつほーお疲れ。入って入って」

「おじゃましまーす」

「お、おじゃまします」

玄関で話をしていると後ろの方から女の人が見えた。

「あらあら、早く中へ入ってもらいなさい！」

「わーっってるって！あ、これうちの母さん。」

「こんにちは！」

「今日はよろしくお願いします。」

挨拶をすると暖かい笑顔で迎えてくれた。

「いいのよ。はじめまして。この子がいつもお世話掛けるんでしょ？いつもすみません。」

「いえこちらこそ！」

「あの、これつまらないものですが、どうぞ食べてください。」

瑠唯は忘れぬうちにとお土産を渡した。

「あらあ。気を使わせちゃって。ごめんなさいね。ありがとう」

「じゃあがってさっさと行こうぜ。母さん、今日10時には帰る。」

「二人を振り回すんじゃないよ。そんなに遅いんだったら迎えに行くけど」

「いや！大丈夫だって！！瑠唯！美羽！上あがるうぜ！」

「うん。」

「はい」

そして上に行くくと翔の部屋があった。

その部屋にはギターとanfangのCD&DVDコーナーがあった。

「凄い。全部そろえてんの？」

美羽が尋ねると嬉しそうに翔が答える。

「おう。バイト頑張ってるんだぜ？流石にツアーのグッズとかはそろえねえけど」

「凄い十分だよ。」

「ありがとな！ってかホント大丈夫だったのか？家の人に言わなくて。」

このライブが決まった後言わないと決めた瑠唯はまず初めにこの日をどう乗り切るか考えた。そこで翔の家に泊めてもらえないか頼ん

だのである。

返事はもちろんイエスだったが家族にライブの事を言えないと話すと大丈夫か心配されていた。

「うん。ごめんね。なんか巻き込んだ形になっちゃって。」

「そう言うならもう言わねえけど」

「うん。本当にありがとう」

話をしているといつの間にか時間になり急いでライブ会場へ向かった。

楽屋を一室かしてもらいそこで服を着替え直す。

衣装と言ってもパンクに見える服装を自分の私服からチョイスした物だった。

瑠唯はパンクな服装と言っても持つておらず急ぎよ美羽と服を買いに行ったのだった。

着替えると突然緊張が瑠唯に襲ってくる。

大丈夫、かな。

できる、かな。

深呼吸をしても手の震えは収まらなかった。

「瑠唯大丈夫か？」

翔が心配して声をかけてくれる。

「う、ん。」

「全然駄目じゃねえか」

龍之介が突っ込んでくるがその龍之介も下手な笑いしかできていなかった。

「全く。まあしょうがないよ緊張しちゃうよね。けど、頑張るしかない。」

するとノックが聞こえスタンバイの時間となった。

「大丈夫。今回は失敗してもいい。」

「せんぱーい」

そりゃないっしょーと翔がへらへらと笑う。翔はあまり緊張していない様子だ。

「うよおおおおおい、Lugnerいくつぞ。」

4人で手を重ねる。

「「「「おー！」「」「」」

4人はステージへあがっていった。

ステージの上はとても熱かった。

目の前を見ると翔の先輩のバンドを見に来たお客さんが所せましにあふれかえっていた。

その先輩のバンドはこの辺りではとても有名で音楽事務所の人たちもオファーのために来ているようだった。

そんな中である…更に瑠唯は緊張してしまっていた。

明が自分たちのバンドについて説明しているが全く聞こえなくなっていた。

どうしよう、どうする。にーちゃんだったら？

兄ちゃんだったらどうする…？

するとふと昔の事を思い出した。

あれは、ツアーが終わった後楽屋へ行った時の話瑠唯が質問した。

『にーちゃんさ、緊張しないの？』

『緊張？』

『うん。あんなにたくさん人の前で歌うのは緊張しない？』

『あー…』

香南は上をみて考えるとクスツと笑い瑠唯の方を見る。

『緊張は、しねえな。』

『なんで？』

『瑠唯や美羽、七海の事を考えると全然緊張しなくなるんだ。そして暖かくなる。そうになったら全く緊張しねえ』

にーちゃんや、美羽や、ななちゃん、一樹の事…？

瑠唯は目を閉じる。

そして家族の事を考えた。

すると皆の笑顔が浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。目を開けるともう緊張しなくなっていた。

「じゃあ最初はblack kissです。もりあがろーぜ！」

翔が言つとすぐさまblack kissのギターイントロが始まった。

集中した瑠唯は何にもとらわれない空間を作っていた。

anfangのけれど瑠唯たちの空間を。

客はanfangのコピーバンドと知りさ程うまくないだろうと思っていたが、瑠唯の声を聞いた瞬間その考えは一変していた。

瑠唯の声は全てを飲み込む。

それがどんな感情であろうと一瞬にして瑠唯の感情に飲み込まれるのだ。

2曲目3曲目に入ってもそれは全く変わらず、気づいたら終わっていた。

終わった瞬間瑠唯たちは何にも変えられない達成感を感じていた。しかし終わった後全くの沈黙が続いた。失敗したのか？メンバー一同不安に陥る。しかし、途端に盛り上がる観客に驚く。そしてすぐさまアンコールされた。

「あ、アンコール…？」

「まじかよ…！」

「本当に…？」

驚いていたが、あくまで余興で歌うため他に曲を全く用意していなかった。

すぐさま明が説明を入れる。しかし収まる気配がなかった。

「ど、どうする…？」

幕を見ると翔の先輩たちが続けてもいいと促してくれた。

「うーん、じゃあこうしようか。瑠唯くん、backbone}歌



えるよね？」

「は、はい。」

「まだ3人しかいなかった時にこの曲をひけるようにしていたんだ。合わせて歌ってくれるかな？」

大変だと思うけどと明は苦笑いした。

「は、はい！やります。」

前を向くと瑠唯が話し始めた。

「アンコール、ありがとうございます。僕たちは今日初めてステージに立って何も分からないまま段取りもステージの上でしてしまうような新米です。けど、もっともっと上手になってまたライブさせてください。最後にbackbone in the earth 聞いてください。ありがとうございます。」

72

瑠唯の歌うその曲はanfang以上に暖かいものを感じることができ、何か違うものが宿っているようだった。

歌い終わると礼をしてはける。

瑠唯たちへの拍手は鳴りやまなかった。

「お前らすっげーよかったよ！！！！」

翔の先輩の楽屋へ感謝を述べに行くとニコニコと話してくれた。

「溜唯つてお前か？翔から聴いてたけどすげーうまいな。どうだ。俺らのバンドに入つてこねーか？」

「ばんばんと肩をたたかれるが苦笑いしかできなかった。」

「先輩だめですよ！俺たちの仲間なんですから！」

「わりわり。お前らも凄かったぜ。anfangをあんだけコピーできるバンドはそうそう言ねえと思つぜ。」

「うんうんとその先輩たちが頷いているとこんこんとノックが聞こえてきた。」

「入ってきたのは知らないおじさんだった。」

「あ、岩崎さん。今日はありがとうございます。」

「その先輩がぺこりと頭を下げるので溜唯たちも頭を下げる。」

「そして先輩が説明してくれる。」

「この人は岩崎さん。ここのライブハウスの店長さん。岩崎さん、今日余興でしてくれたやつら。」

「うん見てたから知ってるよ。はじめまして。岩崎です。」

「岩崎さんが手を出してきたので明がすかさず握手をする。」

「はじめまして、Ugnerのリーダーの明です。本日は貴重な経験をありがとうございます。」

「いやいや。こちらこそあれだけ盛り上げてくれてありがとうございます。」

「それでね、と話を続けた。」

「君たちはこれからどこかでライブをするつもりなのかな？」

「え、ええ、機会があればやらせていただくつもりです。」

「その言葉を待っていたかのように岩崎さんはにやりと笑う。」

「だったら、是非うちのライブハウスを使ってくれないか？」

「…え?!」

「その言葉に一同驚く。」

「いや、今日の客から余興でしたバンドのライブはいつなんだったって何度も何度も質問されてね。もし良かったらうちでやってくれないかな？」

「このライブハウスはとて有名でその店長が言ってくれる言葉は何

よりも嬉しくて何よりも自信のつく言葉だった。

しかし、瑠唯は少しだけ違っていた。

「すみません、少しだけ、返事を待っていただけますか……？」

この言葉を聞いて深く感じていた。

もう限界だと。二人にちゃんと説明しなければならないと。

3人に申し訳ないと思いながらも頭をぺこりと下げた。

## 08 (後書き)

このバンドの名前はIroboriaという語で嘘つきとこの意味です。

どうしてわからないの？

べつして伝わらないの？

l u c i d   l o v e   0 9

ライブの翌日、家へ帰ると二人揃っていた。

香南は友達の家泊まりに行っていたことを七海から聞いたのか瑠唯と美羽にたくさん話しかけてきた。

香南も二人にそのような友達ができたことをとても喜んでいたり。ご飯を食べ終わり、一樹も眠りにつき徐々に4人である時間ができた。

「にーちゃん、ななちゃん、ちょっと良いかな…？」

今がチャンスと二人に話しかけた。

「ん？なんだ？」

「どうしたの？改まって…」

二人とも笑顔で聞いてくる。

流れを読んだ美羽は自室へ帰っていく。

今だ。今しかないと何度も二人を見つめる。

「どうしたの？気分でも悪いの？」

「いや、あの、その、」

つい下を向いてしまう。

言いたいのに二人に笑顔を見ると言えなくなる。

この笑顔を消したくない。

「な、なんでもない」

ガバツと立ち上がると急いで部屋へ戻る。

そして涙が止まらなくなる。

男なのに泣くな泣くなと必死に涙をぬぐう。

どうして僕はこんなに弱虫なのだろう？

どれだけ涙を流しても答えは出てくれなかった。

「はあ。」

anfangはスタジオでレコーディング中だったがどうも香南が乗ってくれない様子だった。

「どうしたのさー。昨日リフレッシュしてきたんでしょ？」

夏流が不思議がる。久々に夜ゆっくりできたのだ。

今日はのりのりでレコーディングに挑んでもいいはずだ。

それなのに気づけばため息、どこかうわの外だった。

「いや、その…なんか瑠唯が…」

「瑠唯？瑠唯がどうしたんだよ」

最近あいつ楽しそうなんだろ？と燎が尋ねる。

「昨日凄く真剣な顔で俺とななと呼んだんだけど、突然何でもないって部屋へ戻っていったんだ。少し泣きそうな顔で…」

その話をしながら香南も辛そうだった。

「俺たちじゃあ、相談に乗ってやれねえのかと思って…」

「なるほどねえ…」

周もコーヒーをすすりながら聞いていた。

「瑠唯も今ちようと思春期だしなあ…悩んでるんだとは思うけど…」

「そうだねえ。見守ってあげるのがちようどいいんじゃない？瑠唯

くんもバカじゃないんだから変な方向には走らないと思うし」

「…そうかな。」

香南もとても心配そうだった。

香南にとって七海とは違う意味で瑠唯と美羽が大切なのだ。

それなのにできないもどかしさが香南を襲っていた。

次の月曜日、放課後突然先生に呼び出しをされた。

「日向、ちよつといいか？」

「はい……」

なんだろうと不思議に思いながらも瑠唯は先生についていった。

職員室へ行き見せられたのは成績表だった。

先日の中間の結果が出たのだ。

「日向、お前順位が100番以上落ちている。どうしたんだ？」  
点数は赤点ぎりぎり順位は後ろの方だった。

ただ黙ってることしかできず、瑠唯は下を向いた。

「部活が問題なのか？」

その言葉にハツと前を向く。

「ちつ違います！！部活は関係ありません。」

「だったらどうしたんだ？俺はそれを聞いている。」

「それは……」

唇をかみしめる。両立していなかった自分が悪いのだから。

「どちらにせよ親御さんには言う必要があるから。今から来てもらうことは可能なのか？」

「え?!」



瑠唯は驚く。まさかそこまでことが大きくなるとは思っていなかったのだ。

「当たり前だろう。一応進学コースで入っているんだ。これだけ落ちたら、懇談会の前に伝えなければならぬだろう。」

瑠唯の顔が真っ青になる。

そして先生が家に電話するのをただただ眺めているしかできなかった。

七海は電話をもらいすぐ学校へ向かった。

先生から話を聞き、一緒にいた瑠唯と一緒に帰る。

『進学を希望されているなら部活を考え直した方が良いかと。』

先生にそこまで言われた。

部活がそれほどまでにきびしいのか？

部活が厳しいことは良い。しかし普通だったら勉強も大事だと顧問が言ってくれるのではないのか？

七海は瑠唯が入っている部活に対し不審に思い始めていた。

そして夜、家に帰った香南に少しだけ時間をもらい瑠唯と話し合う

ことにした。

成績に関しては香南は何とも思っていない様子だったが昨日の事が頭に残っているのか頷いてくれた。

瑠唯はご飯を食べる時も、こうして3人でいる間も終始顔を真っ青にしていた。

「瑠唯、えつと、今回はどうしたの？」

七海が話し始めたが瑠唯は下を向いたままだった。

「ごめんなさい。」

「謝らなくて良いのよ。部活、そんなに厳しいの？」

瑠唯は首を振る。ちゃんと話は聞いているようだった。

「瑠唯、ちゃんと話してくれないか？俺たちは何も聞いてない。どんな絵を描くとか、どんな先生に教わっているのかとか。」

瑠唯は真っ青な顔を前に向けると唇を震えさせる。

「ぼく、」

ようやく話してくれた言葉に二人は耳を傾ける。

「僕、嘘、ついてた。」

その言葉に二人は驚く。

「うそって、なに？」

七海が尋ねる。

「美術部に入ってるって、うそ、ついた。」

「・・・」

「・・・」

二人は何も言えなくなった。まさかそんな嘘を瑠唯がつくとは思っていなかったからだ。

「ほんとは、違う部活に入ってる。」

「・・・」

「・・・それはどんな部活なんだ？」

香南はまっすぐ瑠唯を見つめる。その顔に思わず瑠唯はびくっと肩を震えさせる。

そして下を向くと首を振る。

「・・・言えない。」

「どうして?」

それでもなお瑠唯は首を振る。

思わず七海と香南は顔を合わせてしまう。

「あのね、瑠唯、言ってくれないと...私たちとても心配してて...」

「どうして言ってくれねえんだ?俺たちじゃ駄目なのか?」

「違う。」

「じゃあ...」

「・・・ないで。」

瑠唯が何かを呟いた。その顔からは一粒の涙が落ちていた。

「...瑠唯?」

七海が心配そうに声をかけるとガバツと瑠唯が立ちあがった。

「もう僕の事心配しないで!!!ほっというて!!!!!!」

そしてリビングのドアの方へ向かう。

「おい瑠唯!!!」

香南も急いで追いかけるがすでに瑠唯は玄関から外へ出てしまった後だった。

外は雨。

真っ暗な世界だった。



## 09 (後書き)

07話に中間テストを行った話を追加しています。少しですが気になる方はもう一度読んでいただけると幸いです。

10 BL有

ゴールの见えないこの世界は

暗闇へと

漫食されていく

l u c i d  
l o v e  
1 0

気づいていたら走っていた。  
何も考えていなかったんだ。  
ただ、なぜ、どうして？悔しい気持ちだけが自分の中にあった。  
それは伝わらない思い、自分自身のできなかったことへのものであ  
った。

気づけば雨の中知らない場所にいた。

「ジュ、ジュ…」

いつもだったら七海や香南が方向を示してくれそこをただ歩くだけ  
だった。

しかし今日は、まるで知らないところにひとりでいる。  
瑠唯は自分で歩くことの寂しさ、恐怖心を初めて知った。  
とにかく近くに知っている場所はないかと歩く。  
しかしそれからどうする？  
どうしたらいいのだ？

あれだけ大きなことを言ったのにどのような顔をして帰れと言っ  
たのだろうか？

目の前が全く見えない。

瑠唯は思わずしゃがみこんでしまった。

「子猫ちゃん、みつけた」

ふと声をかけられる。そして雨が当たっていないことを実感する。上を向くと周が傘をさして立っていた。

「あ、」

思わず後ずさってしまつ。

「全くそんなことしてたら更に濡れちゃうよ。」



「けどぼく、」  
首を横に振る。それを悟ったように瑠唯の頭を撫でる。  
「わかってる。帰りたくないんでしょ？うちにどうぞ」  
差し出された手に思わず疑問を抱く。

どうして？

しかし周はただ笑っているだけだった。

「瑠唯ー！」  
周と一緒に周のマンションの下へ行くと夏流が待っていてくれた。  
周が見つかった時に夏流に電話をかけていたようだ。  
夏流は濡れた瑠唯を「よかった」と抱きしめるとマンションの中へ案内した。

そして周の部屋まで行き風呂に入る。

お風呂のお湯は瑠唯の雨で打たれた体をほんのり温めてくれた。

「あ、ありがとう…」

「いえ。バスソルトいいでしょ？僕のオススメ」

ニコニコ言いながら話してくれる。周と夏流は一緒に住んでいるので勝手知ったる状態なのだ。

「あの、」

「ん？」

ココアを出してくれた夏流に瑠唯は質問する。

「ななちゃんたちに…」

するとにっこりと夏流は笑った。

「電話はしたよ。やっぱり無事ってこと言っておかないとね」

「ごめんなさい…」

思わずうつむく。ココアを持つ手が震えていた。

「瑠唯さ、手をだしてみて？」

夏流が突然笑顔で手を差し出してくる。

思わずその手に自分の手を乗せると夏流はまじまじと瑠唯の手を観察した。

「瑠唯さ、最近ギター触ったでしょ？」

「え?!」

確かに翔に触らせてもらったが、どうしてと思わず顔に出してしまっ

その顔を見て夏流が微笑む。

「僕はギターリストだよ。それくらい見たらわかるよ」

「あ…」

「瑠唯さ、今バンドやってるでしょ？」

とうとう瑠唯は目を見開く。

「やっぱり！僕の目は正しかったね。」

「さすが、なつ。大正解だったね。」

「あの!?!?!」

思わず大声を出してしまう。

周と夏流がこちらを向く。

「なんでそれ、を…にーちゃんたちに…」

「もちろん言っていないよ。隠したいみたいだったし。」

ほっと一息つく。どうやらばれていないみたいだった。

「なんでかって言うとな〜最近瑠唯の目がそーっくりだったの。」

「…誰に？」

思わず不思議そうに尋ねてしまう。

「昔、バンドをやったそうにしていた香南に」

にっこりと笑う夏流に瑠唯は驚く。

「香南は最後に入ったんだけどね、その前からやりたそうな目をしてたの。けど香南ってあんまり自分から言わないでしょ？けどずーっと物欲しそうにギターとかベースとかみてるからあーやりたいんだろうなって。それが今の瑠唯の顔とそっくり。」

「全く本当に家族だねえ。そっくりだよ。」

その言葉に顔を真っ赤にする。

「けどさ、どうして隠したりしてたの？香南だったらほんとギターでもベースでも何でも買い与えそうなのに」

不思議そうに話す夏流に俯きながら瑠唯が話す。

「ずっと昔に歌手になるのは反対だった。だから僕…」

「うそ！？香南そんなこと言ったの？」

「直接ではないんだけど…」

「ふーん。あの香南くんも…言うねえ。」

うんうんと首を縦に頷きながら周が言う。

「うーんまあ気持ちわからなくもないけどねえ。」

夏流がマグカップを持ちながら穏やかに笑う。

「僕たちがいる世界ってさ、奇跡でできてるようなもんなんだよね。その奇跡の中に入れるかどうかも運次第。辛いことも喜び以上にいっぱいある。そんな世界に可愛い可愛い瑠唯を入れたくないんだよ。」

「そうだね。なんて言ったってanfangの宝だもの。瑠唯くと美羽くんは。」

一樹はまた少し別だけどね。と周が付け加えながら言う。

「だからこれは親心。瑠唯も良く考えな。それ以上に行きたいのか、単なる趣味で良いのか。」

笑顔で言う夏流の言葉は何よりも重たく感じた。

「まああつちも今は興奮してるし瑠唯もななちゃんとかに会いづら  
いだろうししばらくはこつちにいいよ。瑠唯もきつとやらなき  
やいけないこと、整理しなきゃいけないことわかってると思うから  
夏流が微笑んで頭を撫でてくれる。」

「まあ、俺たちと3人生活だけどね。泊まる分、ちゃんと家政婦や  
つてね?」

にやりと笑う周に思わずクスツと笑ってしまふ。

「ありがとう…」

よしやく穩やかな気持ちでコロナを一口飲んだ。

1  
1

そして君の勇気に

一歩近づけると思ったんだ

君は僕の

憧れだから

夏流が朝起きるとすでに朝食が用意されていた。

「あ、なつにーちゃんおはよう。あまにーちゃんは今シャワー浴びてるから。」

「これ、みうみうが用意したの…?」

そこにはホカホカの白ご飯、味噌汁、鮭と日本の朝食ときたらこれ！と言われるようなものが並べられていた。

「あ、もしかして洋食だった…?」

片付けようとする瑠唯を慌てて制する。

「待って待って、違うよ。僕たち基本何でも食べるから。ありがとうー!」

まさかこんなにも瑠唯の料理レベルがアップしているとは思ってもみなかった夏流だった。

「夜僕たち基本的に帰ってこないから夜ご飯は僕が作って置いておくよ。」

周もシャワーから帰ってきて3人でご飯を食べる。

「あつ僕作るよ。疲れているのに申し訳ないし。」

「いやいや、瑠唯に負けてらんないからね!その分朝ご飯はよろし

くね？」

「うん！！」

少しずつ笑顔を取り戻している瑠唯に安心した夏流と周だった。

学校へは行かなければならない。そう思いいつもと違った時間に登校する。

いつもと違う道にもものすごく違和感を覚える。

それでも、歩かなければと瑠唯は首を振りながら足を進めた。

教室へ入ると翔が飛び出してきた。そして瑠唯の肩をがしつとつかんできた。

「おい瑠唯無事だったんだな！？」

「・・・え？」

瑠唯はわけがわからないと頭にはてなマークを撒き散らしていた。

「昨日、美羽から電話かかってきたんだよ。お前がいなくなったっ



て。よかった。」

ほっとした様子で瑠唯の肩をたたく。

瑠唯が言葉を発しようとするや突然後ろのドアが開いた。

音にびっくりすると美羽だった。

「み、う…」

下を向いている美羽は顔が全くわからなかったが、どしどしと音が鳴るような勢いでこちらに向かってきた。

そしてまっすぐ瑠唯の方を見たかと思うと思いつき瑠唯の顔を殴り飛ばした。

殴られた瑠唯は受け身の体制もしていなかったため後ろの机に倒れる。

しかしそれにお構いもせず美羽は瑠唯に馬乗りになり服を持ち上げ瑠唯に顔を上げさせる。

「心配したんだからなっ！！！！このバカっ！！！！大バカ野郎！！！！」

瑠唯の胸で泣く美羽、その後ろで安心した様子の翔を見て瑠唯は自分がどれだけ沢山の人に迷惑かけたのか初めて感じていた。

「じゅんっ、じゅんなっ」と

殴られ頬が腫れあがったので美羽と翔についてきてもらい保健室へ行く。

養護教諭に治療してもらい保健室を出ると瑠唯は二人の方を向く。

「少しだけ、時間いいかな？」

二人には話しておかなければならないと思ったのだ。

それから屋上へ行き昨日までの出来事を話した。

美羽は知っていることもあったがそれでも昨日のことも全部話した。ずっと前から懂れている音があること。

それを自分でも挑戦してみたかったこと。  
けど自分の兄に反対されていること。  
それでもやりたくて部活に入ったこと。  
もちろん姉と兄には秘密にしていたこと。  
しかし自分の不甲斐なさで成績が落ちてそれがばれてしまったこと。  
色々話しあつてつい反抗して家を出てしまったこと。  
今は兄の友達の家にしばらく身を置かせてもらうこと。

「その兄の友達に僕の家族みたいなもので、とても心配してくれてる。僕が趣味で終わるのか、それとも本気でやりたいのかじっくり考えなつて言ってくれて…」

「そうだったのか…」

「ごめんね。なかなか話せなくて。僕、どうしたらいいかわかんなくて。」

泣きそうになる自分を必死に抑え下を向く。

「瑠唯。そんな時のために俺たちがいるんじゃないのか？」

「…え？」

瑠唯が顔をあげると翔がにこつと笑っていた。

「俺や先輩達、それから美羽だつているじゃねえか。皆で考えようぜ？とりあえず一生懸命やってみるんだよ。それから皆で進めそうだったら頑張る、駄目だつたつてまだまだ時間はあるんだし。」

「な？と瑠唯の肩をたたく。その言葉に美羽が大きく頷く。

「そうだね。俺だつてテニスやつてるけどプロになれるかどうかなんて全くわかんないんだぜ？それでも一生懸命やつてる。上を目指して。お前も今この時間だけは上を目指してやってみれば？その後の事はその時一緒に考えてやるからさ。」

瑠唯の目にはまたもや涙があふれてきた。

「ほら涙ふけて。あと教室にあるんだけど、ななちゃん、お弁当  
瑠唯の分も作ってくれてるから。後で取りに来いよ？」

「ななちゃんが？」

一度涙は止まり美羽を見る。

「ああ、多分作ってないだろうからって。ビンゴだろ？」

「・・・うん。」

弱いままだけど僕にはこんなに素敵な兄弟や友達がいる。

それがただただ嬉しい瑠唯だった。

放課後部活へ行くと早速メンバーの人たちに自分の事情を話した。自分なりに本気ですと言つことを示すためには言わなければならぬと思ったからだ。

「僕、頑張ります。この先の事はわからないけれど、今はやってみたいんです。だから、ライブハウスでのライブ、引き受けてたいです。」

「お前…」

「わかった。俺たちも一緒に頑張らせてくれるかな？」  
明の言葉に瑠唯はほっとする。

「はい！」

それからというもののLugnerは月に1、2回のペースでライブをすることとなった。夏休みなんかは毎週のようにしていた。たちまち知名度を上げることとなりライブの人気は上々。いつの間にかライブハウスのトップバンドとなった。

気づけば秋。あつという間に季節は巡っていた。

愛の欠片が

堕ちてゆく

僕はどこで

間違った？

j i r i r i r i r i r i

朝の6時。

朝起きると隣に七海はいない。

もうとつくに朝食を作っているのだろう。

そして隣の部屋からは目覚まし時計の音が鳴りやまない。

これでは一樹が起きてしまつと隣の部屋まで行く。

ガチャツと開けても隣の部屋の住人は起きる気配がなかった。

「おい、美羽、遅刻するぞ。」

「う〜ん…にーちゃん今何時い〜」

「もう6時過ぎてる。今日も早いんだろ？」

6時の言葉に反応したのかすぐさま覚醒しガバツと起きあがる。

「やばいっ！！今日のコート掃除俺だった！！！！」

その言葉に起きたのを確認するとクスリと笑い下に降りる。

下に降りると七海が一生懸命朝ご飯をセットしていた。



「香南さんおはようございます！」

「ああ、なな、おはよう。」

朝の挨拶は忘れないと言うかのようにごく自然に香南は七海の頬にキスを送る。

いつまでたっても初心な七海はあつという間に顔を赤くする。

「えっと、今日も卵焼き作りますか…？」

その言葉にコクリと頷く。

瑠唯が突然家出をして早数カ月。

美羽と瑠唯のお弁当の卵焼きを作るのが俺の日課になっていた。

少しでも、できることがあれば。ただその一心で。

卵焼きを作っていると美羽が下に降りてくる。

そして急いでご飯をかきこむと少し冷めた卵焼きの入ったお弁当箱

二つを持って行く。

「瑠唯にもちゃんと、頼む。」

「足りなそうだったらまた教えてね。」

「わかってる！行ってきまーす！！！！」

美羽を見送った後、七海はほっとした様子でコーヒーの準備をし始めた。

言いようのない違和感をまといながら二人でリビングに行く。

何ヶ月経とうが慣れないものは慣れないのだ。

瑠唯が家を出て行った後、俺はすぐさま追いかけた。しかし暗闇の雨の中瑠唯を探すのはとても大変だった。すぐ帰るかもしれないと七海には残ってもらっていた。

しかし、全く見つからない。どこにいるんだ？

もしかして変な人に誘拐でもされているのではないのだろうか。様々な不安が頭の中をよぎって仕方がない。

走ってる最中にバンドのメンバーにも電話をかける。

折角の休みに悪いと今だったら考えるがそれも頭に回らないぐらい焦っていた。

メンバーは驚いた様子で最初聞いていたが、わかったとそれぞれ探しに出てくれた。

必死に走りながら目を血眼にしてまわりを見てみると目の前に見知った人物が現れた。

「にーちゃん？」

「み、うか」

「ぜーはーぜーはーと息をする。」

「どうしたの？傘もささないで…大丈夫？」

「ああ、あの、瑠唯、見なかったか？」

「瑠唯？」

「どうして？という様に首をかしげていた。」

「瑠唯が家を出て行って…」

「え！？」

「見つからないんだ。今、メンバーにも声かけたからもう少し、探す。お前は、家に戻れ。七海と一樹二人に、してるから…」

「わかった…」

少し放心状態の美羽だったが、頷くと走って家の方へ向かっていた。再び俺は足を速める。

俺はあいつに何をした？  
なぜ、全くわからない？  
早く、早く

しかし暗闇の中で人の顔などほとんど見えず徐々に体力も限界に近  
付く。

気持ちだけが焦る中、一本の電話がかかってくる。  
それは周からだった。

急いで出ると周の安心した声が聞こえてきた。

「もしもし!？」

『もしもし?周です。瑠唯くん見つかったよ。』

その一言に目を大きく見開き腰を抜かしたようにその場に座り込む。

「ほんとう、か？」

『うん。どうやらうちの方面に来てたみたい。近くに公園にいたよ』

「そうか、よかった…」

涙が出そうだった。しかしこうしてはいられないと立ち上がる。

「悪かったな。今から迎えに…」

『あ、それはちょっと待って?』

「……は？」

何を言ってるんだこいつは。思わず眉をひそめる。

『うーんとね、瑠唯くんも今結構放心状態でね。なんって言うか、  
今はそつとしてあげた方が良いかも』

「……」

『突然家を出るほど瑠唯くんにとって何かがあつたわけだし、少しお互いに考える時間を持つのが大切だと思うんだよね。』

「けど、」

『しばらく瑠唯くんうちで預かるよ。ななちゃんにも今から電話するし。とりあえず瑠唯今風呂に入ってるから今のうちにななちゃんにかけたいしいったん切るね。香南くんも早くお風呂に入りなさい。』

「・・・」

ぷつと切れる携帯からはもう何も言葉は発せられなかった。

家に急いで帰りドアを開けると玄関で七海が美羽とタオルを持って一緒に待っていてくれた。

「香南さん、瑠唯見つかったって。」

その言葉を話す七海の目からは涙があふれていた。

思わず七海を抱きしめる。

「瑠唯、しばらくあまにーちゃんとここで預かってもらって。」

美羽も疲れた様子でタオルを渡しながら教えてくれた。

「ああ。電話で聞いた。美羽もありがとな。風呂先に入ってくれ。」

その言葉に七海が顔をあげる。

「いいえっ。香南さんが入ってください!!!こんなに濡れて...すいません!!!」

もう風呂の湯は温まっていますからと香南をタオルで拭きながら言う。

「じゃあ悪いけど先に入らせてもらうな。」

俺が入った後美羽が風呂に入り3人でリビングに座る。

七海が入れたお茶を3人ですすっていた。

「えっと、なんでこんなことが起こったの…?」

美羽にとっては予想もつかないことなのだろう。少し不機嫌そうな顔でそう言った。

「実は、今回のテストで瑠唯の成績が100番も落ちて」

「ひゃっ100番!？」

流石に驚いたのだろう。今にもお茶を吹き出しそうだった。

「私、学校に呼ばれて、進学を部活考え直した方が良いと言われて

…瑠唯に部活の事を聞こうと思ったたら突然飛び出しちゃって…」

「あ…」

美羽は天井を仰ぎ見る。

「…もしかして美羽は瑠唯の部活について何か知っているのか？」

俺が美羽に聴くと美羽は肩をびくっとはね上げる。

「あーうーん…まあ、ね。」

美羽が目線をそらしながら答える。

「どうして私たちに話してくれなかったの!？」

「瑠唯が自分から話すって言ったんだよ。それを俺からななちゃんたちに言えないじゃん。」

この件については美羽からも話してもらえそうになかった。

「…分かった。一つだけ。その部活は瑠唯にとって悪いものじゃないんだな?」

美羽の目を見つめると美羽は真剣な顔でうなずいた。

「うん。それは保障する。瑠唯は、今やりたいことをしている。それだけは言える。だから、今はそっとしておいてやって欲しい。」

「美羽……」

「あいつ、ずっと我慢してたんだ。それを今できて、とても嬉しそうで。我儘だと思うけど、あまにーちゃんやなつにーちゃんに迷惑かけるけど、それでも今のあいつを止めないで欲しい。」

真剣な眼差しにしばらく考える。

七海を見ると少しだけ安心したような顔をしていた。

「…わかった。私、美羽と、瑠唯の言葉、信じる。」

「なな、」

「この二人の言葉、私が信じてあげなきゃいけない。香南さん、駄目、でしょうか…?」

無理矢理作ったような笑みに自分の中の決意は固まった。

「…わかった。周と夏流には俺からちゃんとお願ひしておく。」

その言葉に二人はほっとした様子だった。

その夜再び周から電話がかかってきた。

「事情は大体聞いたよ。」

「そうか…その、瑠唯の件なんだけど…やっぱりしばらく預かって欲しい。今俺たちができる最大限の事だと思っただから」

「そっか。香南くん、成長したねえ」

くすくすと笑う周にムツとする。

「瑠唯くんも了承したし、心配しなくても瑠唯くんはちゃんと進んでいるよ。大丈夫。ただ時間はかかっちゃうかもしれないけど。」  
その時間がどの時間を指しているのか言わずもなだった。

「わかった。よろしく頼む。」

次の朝、少しだけ早く起きるとすでに七海は起きて料理をしていた。

「おはよう」

「うわっ香南さん!？」

早い時間に起きたのにびっくりした様子でもそれでも昨日より顔色は随分良くなっていた。

キッチンを見るとお弁当が二つ分作られていた。

その目線に気付いたのか七海が苦笑していた。

「わかつてはいるんですけど、それでも、美羽からなら受け取ってもらえるかなと思ひまして」

「そうか…」

弁当を見ると卵料理がまだのようだった。

それをみて思わず俺もエプロンを取ってしまった。

「俺も、卵焼き、作ってもいいか？」

それから美羽は毎日弁当を二つ持って行き、二つ弁当箱を持ち帰ってくれるようになった。

その弁当に関して瑠唯の感想を聞くことはできないけれど、全て食べてくれているのを見るとそれで充分だった。

メンバーには翌朝お礼を言う。七海からはお礼の手造りゼリーを渡されていた。

それを食べながら夏流と周が瑠唯の事を少しだけ話してくれる。

燎も驚いた様子だったが、今のうちに反抗期が来てよかったなと安心させるような言葉をかけてくれた。

瑠唯に関してはそれから毎日少しだけけれど夏流と周が話してくれるようになった。

部活についてはとても頑張っているらしく夜遅くまで帰ってこない日もあるようだった。

安堵するけれども寂しい気持ち。

どうして自分たちには言えないのか悔しい気持ち。

心のもやもやが消えないまま瑠唯のいない生活は一日一日と過ぎていた。



## 12 (後書き)

お気に入り登録50件超えました！ありがとうございます！

何かリクエストがありましたらかかせていただきたいと思いますのでどしどし何かしらで言ってくださればと思います！

また拍手を設置しましたのでそちらも押していただければと思います！

13

言葉に表すことはできないけれど

きつと

それは胸の中に

l u c i d  
l o v e  
1 3

「やっつと終わった・・・」  
anfangのマネージャーである雅は今日は事務作業のため会社の自分の机にずっといた。  
なかなか事務作業を終わらすことができなかつたため休み返上で会社に来ていた。

まったく、次から次へと事件を起こしてくれるなあ…

結婚したと言うのになかなか奥さんに会えず寂しい思いをしている雅。

瑠唯の件でももちろん走らされた。

奥さんのおいしいご飯を食べている途中だった。

無事に解決したと思いきや瑠唯のまさかの家出。

それに伴うカンサンへの配慮。(いくら頭で理解していてもテンションの下がり具合は半端ではなかつた)

瑠唯の家出の原因であるやりたいことは聞いた本人たちである夏流と周が教えてくれなかつた。

きつと、本人が納得した時に話してくれる。

僕たちはそれを待つ義務がある。

気になって何度も聞いたが返事は同じだった。  
しかたがないとそれ以上は聞かなかった。

ようやく落ち着いてきたと思っただら今度は曲作りでいざこざが起った。

先日から行っている曲作りが全く進まないのだ。

その理由とは香南がシヨックを受けていると言うこともあるが、それ以前に全員が納得のいく曲ができないのだ。

音楽を何年もやると初めは一緒だった音楽の方向性も少しずつずれてくる。

ある程度形になってもどこか anfang ではない、別の曲になるのだった。

作ってはボツ、作ってはボツと徐々にメンバーの士気も下がってきているのだった。

なんとかかしないといけないと思いつつもどうしたらいいのか分からず結局休みになった。

今日こそ奥さんの手料理を食べようと雅は急いで帰る準備をすると後輩マネージャーが興奮した様子で部屋へ戻ってきた。

「先輩もう帰るんですか？」

「うん。奥さんが待っているからね。」

すると後輩は残念!という様に肩を落としていた。

「どうした?」

「いやそれがですね。すっげーいいバンドがいて今日の夜一緒にそのライブ行ってみませんか?って誘おうと思ったんですけど…」

「ふーん…」

「しかも、anfanningのコピーバンドですよ?かなりレベルが高いらしいっす!」

「へえ…」

この業界で噂になる、しかもanfanningのコピーバンドと言われればとても気になる雅だった。

奥さんの料理とそのバンドのライブを天秤にかける。

「そのライブって来週の金曜とかある?」

「ちようど来週は金曜なんすよ!」

「じゃあ金曜案内してくれないか?メンバーも呼んで行ってみようかなって。」

ちようど来週の金曜はメンバー全員空いていた。

最近瑠唯の事で色々悩んでいる香南の気分転換になれたらと思ったのだ。

更に言うと今のメンバーにレベルの高いコピーバンドがいい刺激になればという思惑もあった。

「まじっすか!?うわーanfanningのメンバーは俺直接お会いしたことないんですっげー緊張します」

お前が緊張してどうするんだよと雅は思ったがよろしく頼むとそそくさに会社を出て行った。

「コピーバンド…?」

「そう」

夏流の言葉におもしろそうだと参考にもらったチラシを渡す。

「どうやら高校生らしいんだけどいい刺激になると思ってチケット用意してもらったんだけど行かないか?」

「なるほどねえ…」

周が面白そうに笑う。

「自分たちの曲を歌ってくれてるやつらを見るのも面白そうだな。」  
「燎も楽しそうにチラシを眺めていた。」

「香南は?どうする?」

「…別に」

本当にどちらでも良いというような顔で応えてきた。

「うーん、じゃあもしも良いと思ったら先帰ろうか。俺送ってくし。」

雅の言葉に香南はコクンと頷く。

まったくもって自分の家族以外の事に関しては無頓着この上ない香南だった。

次の週の金曜、早速その後輩の案内でライブハウスについた。

後輩は anfang に会えた嬉しさで一人興奮していた。

こいつはなにを目的に来たのかわからないと雅は苦笑していた。

客席に向かうとそこは業界席らしく、様々なレコード会社の人たちがそろっていた。

「すげーな…」

ひゅ〜 と燎が口笛を鳴らす。

「どうやらジュエリストも彼らを狙ってるらしいんすよ。」

「ジュエリスト…?」

その言葉に雅は眉をひそめる。

「ええ。一応まだ名をえていますけど、ここらでもう一度 anfang みたいに爆発的人気のバンドを手に入れたいんだと思います。何度かアピールしているのを見たことがありますし。」

その言葉にメンバーはため息をつく。

「入ったらかわいそうだな…」

「まあやつらの運次第だな。ここでジュエリストの裏を知ってるか知らないかにかけるしかねえ。」

「もし良いバンドだったら雅さんがなんとかしてくれるかもしれないし?」

にこやかに周が問いかけてくる。

しかし香南は全く興味のない様子でステージを眺めていた。

頭の中は最近の話題中心人物、瑠唯でいっぱいの様子だった。

「まあ、君たちと同じぐらいだったらね」

香南の姿にため息をつく。雅の顔は良い曲を歌うか、歌わないか見極めるマネージャーの顔になっていた。

突然真つ暗になったかと思うとギター之音が入ってきた。

そしてぱつと明るくなるとボーカルの声が入ってくる。

曲は13番目の祈りだった。

ここまで完璧にこの曲を歌うバンドも初めてだったが、メンバーが反応したのは他のところだった。

最初は眉をひそめているだけだった香南が徐々に目を見開く。

あれ、は…

香南がぱつと立ちあがる。

「溜唯…？」

香南はただただ呆然と立ちあがっていることしかできなかった。



思いだせあの闇を

二度と間違わないために

l u c i d   l o v e   1 4

周の家で暮らすようになってから瑠唯の生活は一変した。  
朝早くに起き朝ご飯を作るそしてその傍にメッセージを添えておく  
のである。

朝が苦手な瑠唯にはとてつもなく大変なことだった。

二人との生活は思っていた以上にすれ違いの生活でほとんど会うこ  
とはなかった。

学校へ行きその日の予習をする。

授業もまじめにうけるようになった。

昼ごはんには美羽が七海から受け取った弁当を食べる。

少ししょっぱい卵焼きが七海らしくないと思いながらもそこに暖かさを感じていた。

放課後には練習をし学校に残れる限界まで残る。

ライブの前にはチラシなども皆で試行錯誤しながら作っていた。

学校以外では個人で練習することになっており、瑠唯は家に帰り二人がほとんどいないので好きなだけ練習をしていた。

そして夏流が作ってくれてるご飯を添えてあるメッセージを見ながら食べ掃除、洗濯をするのである。

今までのただ流されている時とは打って変わってとても忙しくなによりとても寂しかった。

順調のライブの客も増え、瑠唯も少しずつ慣れてきた頃控室に岩崎さんがひとりの客を連れてやってきた。

「皆ちよつと良いか？」

「なんですか？」

明が答えると後ろからスーツを着た若い男性が立っていた。

「こんにちは」

「……こんにちは……」

メンバーはわけがわからないと頭にはてなを浮かべながら挨拶をした。

「私はこういうものなんだけれども……」

若い男性は話しながら名刺を差し出す。

メンバーは一同に驚く。

その名詞に書かれていた会社がレコード会社で有名なジュエリストだったからだ。

「あ、あの、」

翔が慌てて尋ねようとするが口が全く回らなかった。

「突然すまないね。今日のライブ聴かせてもらったよ。とてもよかった。」

若い男性は4人を特に瑠唯の方を見渡し話す。

「ぜひ、ジュエリストと契約を結ばないか？」

再びメンバーは驚く。

「俺らで…いいんすか…？」

龍之介が声を震わせ話す。それもそうだ。

自分の尊敬しているanfanguが昔所属していたレコード会社だ。しかもそれなりに知名度が高い。そんな会社が自分のバンドを認めてくれたのだ。

「昔、anfanguを育てたのは弊社だ。きっと、君たちを成長させて見せるよ。それだけの力がうちの会社にはある。」

にこにこしながら誘う若い男性に瑠唯は眉をひそめる。

anfanguが以前ジュエリストに所属していたことはもちろん知っていた。

しかしなぜやめたのかその理由を聞くことはなかった。

覚えていることと言えばその頃に香南が怪我をしたこと、そして七海と結婚したことであった。

初めて一緒に風呂に入った時に見た腕の傷跡それは幼い瑠唯にとっても強烈な印象を与えた。

』に「ちゃ、うで……』

』ああ。これは……』

瑠唯が今にも泣きそうな顔を見ると香南は瑠唯の頭を撫でてくれた。そして愛おしそうに、辛そうにその腕の傷を見た。

』ななを守った勲章だ。』

』くん……しよう?』

』俺の、俺の誓いなんだ。もう二度とななをあんな目にあわせない。』

「瑠唯……?」

ふと意識を向けると翔が瑠唯の顔の前で手を振っていた。

「ふえっ?ご、ごめんなさい!!」

「突然で驚かせてしまったかな?」

若い男性は苦笑するとそれぞれメンバーに渡していた名刺を瑠唯に手渡す。

「悪い話ではないと思うよ?また来週聴きにくるよ。良い返事を期待している。」

そして岩崎さんと一緒に出て行ってしまった。

「どっどっします!?!」

「どうするもこうするもこんなチャンス二度とめぐってこねえぜ! ?この話乗るしかねえだろ!」

「そうだね。まさかあんな所からオファーをもらえる日が来るとは思っていなかったよ。」

3人はかなり乗り気であった。

しかし瑠唯は嫌な予感しかしない。

「ぼ、僕は反対です。」

瑠唯の声にメンバーがいつせいに瑠唯の方を向く。

瑠唯はかなり真剣な顔をしていた。

それに龍之介が瑠唯の胸ぐらをつかむ。

「お前それ本気で言ってるのか!? お前が言っていた本気ここで認めてもらえたんだぞ!？」

「わ…わかってます。けどはっ反対なんです…!!」

「先輩落ち着いてください!!!」

翔がなんとか二人をはがす。

しかし龍之介は瑠唯を睨むことをやめなかった。

明はため息をつくと瑠唯の方を向いた。

いつも瑠唯に味方してくれる明も今回は味方ではいてくれならしい。

「瑠唯くん、反対する理由聞かせてもらっても良いかな?」

瑠唯はびくびくしながらも反論する。

「あつ anfang が、そのレコード会社を辞めたと言うことは、そこには何かがあるからだ、と思うんです。僕は、そこに賭けるのはとても怖いんです。」

「瑠唯…」

「もう傍で傷つく人たちを見たくないんです。」

「傍で…? どういうことだい?」

明が尋ねるとしまったという顔をした瑠唯は帰る準備をそそくさに始める。

「僕頑張ります。だから、もう少しだけこれは考えさせて下さい。お願いします。」

瑠唯が深く礼をしその場を離れる。

それからというものの少しずつレコード会社からのオファーが増えるようになった。

しかしそれほど大きくない事務所だからかメンバーはそんなに乗り気ではない。

さらにジュエリストの人物は毎回ライブに来て差し入れを持ってきてはジュエリストの利点を述べにこやかに帰っていく。

メンバーの意思が徐々に固まっていくところを瑠唯はただ黙っているしかなかった。

だんだん孤立しているのを感じ瑠唯はどうしようもない焦燥感にかられていた。

その日の帰り道瑠唯は翔と一緒に帰った。

最初は学校のくだらない話をしていたが一瞬沈黙が訪れるとぼつりと翔が話し始めた。

「なあ瑠唯、まだ反対か？」

「翔……」

「ジュエリストの人すげー売りに来てるじゃん。これだけ言ってくるってそうそうないと思うんだ。anfangが移籍した理由も知らねえけど、俺は信じてても良いんじゃないかねえかって思うんだ。」

瑠唯は下を向いた。

そう、瑠唯も恐ろしいくらい自分が正しいのか間違っているのわからなくなってきたのだ。

けど香南のあの辛い笑顔。

それを思い出すと首を横に振っていた。

すると翔はため息をつき瑠唯の方を向いた。

「それは、前言った傷つくとかに関係するの？」

瑠唯が顔をあげると翔が傷ついた顔をしていた。

「俺はそんなに信用できねえか？」

「翔」

「そりゃ言えないことだっと思ってあると思う。けど、その核心付くことを言われないと、俺らはお前の気持ちを分かってやれねえ。全部本音を吐きださねえと俺らの心に響かねえよ。」

瑠唯は口をぎゅっつとじめる。

「瑠唯、俺はお前を信じたい。」

翔は瑠唯の肩をたたくとじゃあなと行って帰って行った。

瑠唯はただ呆然と立ち尽くしていた。

次のライブにももちろんジュエリストの男性は来ていた。

ライブ後に差し入れを持ってきてくれたのだ。

瑠唯以外の三人は快くそれを受け取る。

しかし瑠唯は受け取る気持ちになれなかった。

「瑠唯くんはうちのどこに不満があるのかな？」

流星に痺れを切らしているのかジュエリストの男性も瑠唯に尋ね始めていた。

何も言わない瑠唯にため息をつくと次回返事を聞きに来ると控室を去って行った。

「瑠唯、てめえいい加減にしろよ。」

そう言い始めたのは龍之介だった。

「これ以上延ばしてたらもう機会はねえ。」

「・・・」

「瑠唯、」

「けど・・・」

「そんな勘なんかで前へ進めないじゃこの先進めねえんだよ!!」

「勘なんかじゃない!!!」

気づいたら瑠唯は叫んでいた。

なかなか叫ぶことのない瑠唯に一同驚いていた。

「じゃあ瑠唯、言ってくれるんだな？」

「瑠唯くん」

今まで張りつめていた糸が切れそうだった。

その時どたと外から音がすると岩崎さんがドアを開けた。

「たっ大変だ!! anfangが来てるぞ!!!」

メンバーが驚いてドアの方を向く。

瑠唯の真後ろがドアだったため瑠唯はゆっくりと後ろを向く。

岩崎さんの後ろから雅がまず入ってきた。

途端に目から涙があふれ出す。

そして次に入ってきた人を見て、緊張の糸がプツンと切れるように

瑠唯はヘタリと座りこむ。



「瑠唯、」

「にーちゃん…ごめん、ごめんなさい！！！！！！」

泣き崩れる瑠唯を香南は優しく抱きしめた。

怖いけど

あきらめない

l u c i d   l o v e   1 5

瑠唯がわんわん泣いてるとドアからさらにメンバーが現れた。

「あー！香南が瑠唯泣かせたー！」

ニヤニヤと夏流が笑いながら香南に話しかけると睨まれた。

翔や龍之介、明はそれをただ驚いてみていることしかできなかった。

今まで憧れていた人物が、目の前にいる。  
友達に親しく話しかけている。

香南に頭を撫でられている瑠唯が落ち着いてくると翔が話しかける。  
「えっと、瑠唯…これは一体…」  
はつと瑠唯は3人の方を見る。

3人は驚いたような、困惑した様子で瑠唯を見ていた。  
急いで真つ赤な目をこすり立ち上がるうとすると横の香南が立った。  
「はじめまして、瑠唯の兄の香南です。いつも瑠唯がお世話になっ  
てます」

そして深々と礼をする香南に3人は目を見開く。

「うわー香南親っぱーい」

「ああ言うこともできるんだねえ。」

「いつもしねえけど」

後ろでメンバーがからかっていると香南が後ろを睨む。

「瑠唯、もしかして前言った兄ちゃんって…」

「その、黙っててごめんなさい…」

瑠唯も立ちあがり謝る。

「なんで言わなかったんだよ!!!」

龍之介が前のめりに叫ぶ。

しかし明が龍之介を制止する。

「龍、落ち着いて。瑠唯くんは言わなかったんじゃない。言えなかつたんだろっ?」

明の言葉に瑠唯はコクリと頷く。

「僕、嬉しかったんです。大好きな、anf angをこんなにも愛してくれる人たちがいるって。けれど、言ったらどうなるのかなって。」僕”とanf angの話をしてくれるのかなって。」

その言葉に龍之介がどもり下を向く。

「美羽とも違う人だって認識してくれて、嬉しくて、言えなかったんです…ほんとに、ごめんなさい」

「もしかして、傍で傷ついた人って…」

瑠唯は3人を見渡す。

「ジュエリストを反対したのは、僕の、信じる人を信じたかったんです。」

3人は黙ることしかできなかった。

瑠唯の言葉の裏を知ってしまった以上、今まで簡単に契約を結ぼうとしていた自分が消えようとしていたからだ。

「やっぱりジュエリストから打診されてきてたんだね」

横から口を出してきたのは雅だった。瑠唯は雅の方を向くと頷いた。

「毎回ライブに来ていたんです。けど、」

「なるほどねえ…」

「僕らの時もそうだったね。」

「まあ、乗っちゃった俺らも俺らだけだな。」

メンバーが思い出すように語りだした。

そして今度は香南の方を向く。

そして深く腰を折る。

「にーちゃん、ごめんなさい。」

「……」

「僕、覚えてた。にーちゃんが反対したこと。けどね、けど僕、ど

うしても諦められなかった。」

瑠唯は翔と出会ったころを思い出していた。

やっと、巡り合えたと思った。

半年しか経っていないのにとても濃い時間だった。

中学校の2倍も3倍も楽しくて、ずっと一緒にいたかった。

再び頭をあげ香南を見る。

香南の顔は真剣だった。

「諦めなかったからこんな素敵な友達に出会えた。仲間に出会えた。」

「にーちゃんの音が凄く好きなんだ。僕、ずっとそれが目標だった。」

「僕は、僕もつとにーちゃんに近付きたい。」

しばらく沈黙が続いたが、香南がはあとため息をつく。

「瑠唯の曲、聞いた。」

「うん…」

「瑠唯、お前の声は全てを魅了する。趣味でやってもいざれどこかでオファーがかかる。辞めるか、プロになるかこの世界でお前は2択しかない。」

香南は初めて音楽を聴いて心が動いた。

身内ということ抜きにしても、瑠唯の声、表現力は並大抵のものではなかった。

しかしそれが身内だから困るのだ。

他人だったらメジャーデビューしようがなにしようが関係ない。

瑠唯だから、大切な大切な弟だからこそこの世界に踏み込んで欲しくなかったのだ。

「それでも、お前はやるのか？」

瑠唯は今まで感じたことない香南の目を見る。

それは突然孤島に放り出されるような孤独感感じさせる目だった。

瑠唯は唇を固く結び大きく頷く。

「僕、やりたい。このメンバーで、皆でやりたい。」

「瑠唯、」

「お前……」

翔と龍之介が呟く。

ここまで自分たちのことを想ってくれているとは思っていなかったのだ。

再び香南がため息をつく。今度は翔、龍之介、明の方を向いた。

「瑠唯がこう言ってる。お前らもやる意思があるなら、一カ月後ま

でに一曲曲を作れ。」

「・・・え？」

瑠唯は驚いたように香南の方を向く。

「もう一度、一カ月後のライブ聴きに来る。そこで披露しろ。そこで俺たち anfang が認めないとお前らを解散させる。」

「え?!」

「ま、まじかよ...」

翔と龍之介の言葉にメンバーがクスリと笑う。

「そりゃ、うちの宝物の人生がかかってるからね。僕らも本気で聴くよ?」

「売れるか売れないか、こればかりは俺らでもわかんねえからなあ。」

「少なくとも、オリジナルを作ってくれないと話にならないってこと。」

ね、雅さん?と周が雅の方を向くと雅は苦笑いをした。

「一応、”聴く耳”は持つてるから。楽しみにしてるよ。」

「あの、」

明が香南に質問をする。

「もし、そこで認められたら、俺たちはどうなるんですか?」

その言葉に香南が答えることはなかった。





## 15 (後書き)

お気に入り登録、拍手いつもありがとうございます!!!!  
感想などもお待ちしております^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9344w/>

---

lucid love

2011年12月19日01時48分発行